

続 宇治川夜話

(済美寮時現考) 黄旗亭

「……億兆心を一にして世々其の美を濟せるは……」。今時教育勅語を空んじると云つたら、それこそ老人の繰り言かアナクロニズムの標本見度いに云われる位が閑の山だろう。正に然り、金科玉条を連ねた往年の聖なる白書も国連の破局と共に色褪せて僅に明治者の我等が胸底に名残りを止めて居るに過ぎない。今更「拳々服膺して……」でもあるまいが何かの折不図その一節を口にする時、あの独特の語韻と型にはまった抑揚の中からそこはかなき時代の面影を思い起すのである。

「美を濟す」それは和の精神の真隨であり家族主義をモットーとした我が鈴木商店に取っては最もゆかりの深い字句である。

「済美寮」と云う名こそはその語源を教育勅語の中に求めたものである、「済美寮！」文字通り我等の青春の温床であり、限らない希望と果てしない夢を育み、そして幾多の哀歎を織りなして「厨の人間模様を形成した偉大なる揺籃であった。

幾許もあらずして鈴木商店は雄図空しく挫折する事になったが、その衣鉢を継ぐ日商が歴代の社長の手により社誌「済美」が刊行された。今の「日商ライフ」の前身である、「済美」は茲に法灯の火を絶やす事なく永遠に受け継がれて行く事だろ。そしてそのニュアンスは我々辰巳人に根強い伝統と深い愛着を呼びさませて呉れるのである。私事乍ら筆者の居住する所は偶然にも大阪北野の済美地区と云う、私は何とはなく、「たつみ」と云う字を商号に冠した。

ほのかなる郷愁のなせる業とでも云うべきか、前置きはこの位にしてさて済美寮は、布引、須磨、北野、岩屋、柳田、中山手と大小さまざまに分布されて居た。その何れもが独自の個性を持って居て曾て其処に起居した者の胸底に今も尚深く刻み込まれて居る。その一つ一つにスポーツを当てて見よう。

(二) 布引済美寮

御存知「オリビヤ」である。宿舎としては一番大きく歴史も古い。ひ

と頃は二百人近くも居たのではなかったか、此処に腰をすえた者、仮寓の夢を結んだ者等幾多の人々の交流は鈴木商店の黄金時代をバックに最も華やかで目まぐるしいものがあつた。或る時期の日野さん、高畑さん大屋さんもその一員であつたと聞く。

流道の交差点から北上した熊内行き市電が、布引車庫の在る生田川の方へ右折する一寸手前、今は市民病院前と云う名の停留所になって居るが当時の加納町一丁目停留所下車して左手の山側へどんと突き当たった崖ぎわの台地に三棟の二階建が建て居た。門からゆるい傾斜を一〇米程登ると広い前庭があり、庭を中心に「」字型に三棟の建物が配置された、それぞれの建物の入口へ通ずる小径を区切る様に灌木の繁みや年中青々として居て、行き帰りの一時に一抹のうるおいを漂わして呉れた。

中央正面の建物が以前からあつたもので二階にはバルコニー風の出窓があり、鏝戸があつて、神戸独特のエキゾチックな洋館であつた。左右の二棟は後から増築したもので、之は純鈴木流宿舎で当初から個室本位に設計せられて居た。中央本館に大食

堂や一時に十数人も這入れる浴場があつた。食堂は休日の夕食だけの使用で、平常は茶話会や歓迎迎会や色々の会合に利用された。寒い時季になると日曜休日の夕食は本店の親心から牛肉のすき焼がふる舞われた。十数個のカンテキにがんがん炭火をおこしてめいめいが一人前宛盛りられた肉や野菜の皿を持ちより数名一かたまりになって鍋をかこむのだ。お定まりの早い者勝ちで生煮えの牛肉を取り合い、笑い且つ喰う楽しい夕べを過ぎたものであつた。オリビヤに限らず寄宿舎はすべて独身寮であり、原則として本店教育係の管理下になって居た当時の教育係は高橋行次を主任として田所清記、山崎大八、吉川格、宇津木亥一、楠田一二等が居て教育係としての勤務の上寮の舎監や連絡係や指導係等まで受持して居た。そしてオリビヤには御大高橋さんが家族ぐるみ居住してこの大世帯の見習員を日夜指導薫陶、全神経を集中して居られた。此処での話題は数え切れない、鈴木商店興亡の伏線とも云うべき老大な歴史が刻み込まれて居る。そのオリビヤの中で当時特殊な存在として注目を浴びて居たのは給費学生の一群であつた。彼等は本店各部に配属され

枯 葦

橋本隆正

出来秋を赤屋根と 青向い合い
枯葦を何せん為に 折らんとす
空しさは秋の灯しの 下に在り

巨 花

柳田義一

菊凛々別離の泪堰かれずに
雷鳴に痺れし枯野虚飾なし
見失う顔ばかり秋雲の伊勢路かな
尾花の白波が仏陀の視線を越す
巨花にして花成らず白鳥水に咲く
歳晩の思惟古都残照にわれがなし

「人 生」

今村 菫 橋

人世を長しと思ふ花に酌む
出棺や白百合見つゝ声咽ぶ
須磨涼したゝ漁火のゆるゝまゝ

た中から撰りすぐられた秀才で幾多の試練と豊かな素質を認められた梨撰りばかりであつた。それだけに品行は方正、常に優秀な学業成績を収め、高橋さんの膝下で只管勉学に励んで居た。

勿論、鈴木商店健在なりせば次代の幹部として大なる囑望と大成を約束された人達だけに取りわけ店の崩壊は悲嘆限りないものがあつたであろう。山根仙之助、交野盛賢、森川泰、沼田三郎、篠原憲一、刀根川正男、三田四郎等は既に亡い、僅に嵯峨崎亭、三木秀介、加藤富男、武井一郎、竹下富士松、中居円次郎等が常に辰巳会に参会して健在を誇つて居る。云うなればオリビヤの主見たいな者のオリビヤは終始この人達を中心に廻転して居たとも云える程さわ立った主役達であつた。

(三)

此の頃、大正八年の末の方、私は左第一棟の一番奥の崖際の陰湿な一室に岩本吉備郎、島本正路と三人で起居した。折悪しくもこの棟の取っかかりに高橋さんが居て身のすくむ様な毎日が続いた。私等見習員は皆随分と高橋さんに面倒を見てもらつたものだが何しろ勤務評定の総本家である故に一番煙たい存在であつ

た。悪童連は兎角氏を敬遠し勝ちで陰へ廻っては仇名や陰口をたたいたものだ。高橋さんに親しく持ちかけたり、目をかけてもらうと何様ゴマすりの様に見られるのが厭さにわざわざ反骨を示して強がったものだ。後年、午鈴会の席上へお招きして懐古談に花が咲くと当時の無分別が思い出されて皆冷汗を流した。真底からの教育者で公平無私、温厚の中に強い信念を持った立派な人格者であつた。

正面建家の裏側や北寄りの部屋は概して湿度が高く高橋さんに悪いが「南京虫」の跳梁が甚しく神戸名物のこの夜行性ギャングはやがて全済美寮を横行するのであつた。私は後に歩兵第八聯隊に入営したが此処での寝台虫と称する此奴には他の新兵程苦痛は感じなかつた。恐らくはオリビヤ時代の鍛練の賜物と思う。

オリビヤと南京虫。妙な取り合わせだが寮生活から此奴を無視する訳にはいかない。もう一つ夜の静寂に待ったをかける物がある。大浴場の焚口の側に崖から流れ落ちる清水の取り入れ槽があつた。終日チヨロチヨロと風雅な音を立てて流れ込んで居るもので我等丁稚風情の風流心をそそるでもなく夜もすがら絶え間のない

いには腹が立った。雨でも降ろうものならせせらぎ処ではない全寮にとどろき渡る様な響音で落ち込む音とあふれ出る音との交錯で夜つびで悩まされた事も度々であつた。変なものでもこんな腹立たしかった事が未だに忘れられない。島本正路は間もなく退店して自らの好む道へ走つた。或る意味での叛逆児であり、異色人間であつた。土佐生れの頗る硬骨漢であつたが、何時の頃からか音楽に凝り出し黄色い声を張り上げて私達を悩ました。そして苦心惨憺の末、遂に宝塚少女歌劇のオーケストラへ入団、指揮者の高木和夫に弟子入りした。それからの苦勞は並み大低のものではなく時折会いに行くとピアノのレッスンで痛めた指先に包帯を巻いて居るのが目に沁みる様に痛々しかった。其の頃のオーケストラの部員は僅かに十一名でその中彼もセロで出られる様になり、舞台の前のボックスに姿を現わす様になつた。後に、且つて歌劇の舞台に立つた事のあるピアニストの逢坂関子と結婚したまでは判って居たが、其の後香として消息が絶えた。何うして居る事やら！健在なれば彼もやがて七十才近い筈である。折にふれて友の安否を思うや切なるものがある。